

## 共に生き、ために生きる

—キリストのからだとして—

(一コリント二・二七他)

実にびっくりした。何にか。真珠湾で行われた日米両首脳による演説に、である。安倍さんが「The Power of reconciliation (和解の力)」と少々おぼつかない英語で言えばオバマ大統領も舌を噛みそうにして「オタガイノタメニ」と言う。それだけなら大したことはないと思うかもしれないがそうではない。「和解の力」とか「お互いのために」とは実に今朝の説教の骨格となる概念であり例の二ユースを聞く直前までそんなことを考えながら書齋で唸っていたのだから私の驚きたるやすごいものであった。

閑話休題。私たちの教会では例年元旦礼拝に今年の標語について主題聖句をもとに解説するということを数年来やっている。「一年の計は元旦にあり」を個人レベルだけではなく教会として実践しているのだ。主にあつて深まり、広がった二〇一六年は過ぎ去った。今日から「共に生き、ために生きる—キリストのからだとして—」の標語を掲げ、それを目指して新しい気持ちで進んで行きたい。以下に標語を三つに分けて解説する。

### 一、キリストの体として

私たちが「ともに生き、ために生きる」ことを目指すのはすでに成し遂げられた一つの事実に依拠している。それは「コリント二・一三に示されるキリストのからだに組み入れられる体験である。パウロがここで言っているのは「こうりたい」という願望でも「こうしましょう」という勧めでもない。むしろそれは厳然たる事実である。勿論信徒がキリストのからだに結ばれたということは霊的な事柄ではある。しかしその表れとして信徒は、バプテスマを受け、それぞれの教会に所属する。この事実を大切にせず「まあ、一緒にやりましょう」とか「一つになろう」と言ってもそれはむしろ地に落ちてしまう。人間はそれくらい一致するのが難しい生き物なのだ。しかしそんな分断と排他を好む罪深い私たちを主はキリストの死と復活を通じて結び付けて下さった。そう真の和解の力はキリストのうちのみあるのだ。

### 二、共に生きる

共に生きることは具体的には二つの側面がある。一つは三位一体の神と共に生きる事である。キリストのからだとなった以上、キリストと共に生きるのは必然の帰結である。また私たちを結びつけたお方

であるキリストはインマヌエル、即ち「神我らと共にいまし」のお方である。更にイエスは自らに代わるもう一人の助けとなる聖霊を私たち信徒に与え、共にいることを可能にしてくださいともいる。私たちはその事実に感謝したうえで日常生活の隅々にいたるまで主と共にあることを宣言し、かつ選択していくべきである。

もう一つの側面は兄弟姉妹である。キリストのからだは全世界に及ぶ霊的支配だが、私たちにとつての具体的な現れはこのバテルキリスト教会である。だから私たちの共に生きる生活の最初の実践は教会の兄弟姉妹たちの関係構築にある。キリストのからだとして互いの賜物を喜び、仕えあい、いたわり合うものになるために主が命を捨てられたことを覚えたい。

### 三、ために生きる

「共に」と同じく、「ために」も二つの方向がある。私たちはキリストの体なので、各器官としてキリストのために生きることが望まれている。キリストのためになすべきことは数多くあるだろう。しかしその第一のものは神を礼拝することである。いつも言うことだが礼拝はキリスト教講演会ではない。第一義的には主に私たちの誠を捧げる場である。そのような礼拝を主のために捧げていく時、私たちの

心はもう一つの「ために」へ向かう。即ち人のために生きることである。では人のために私たちは何をすればよいのだろうか。簡単に私たちが何をすればよいのだろうか。つまり聖霊に満ち、よき知らせである救いの福音を宣べ伝え、弱っている者、悲しんでいる者に積極的に手を伸ばし、良き業を行うことである。そうするならば私たちはこの世に対して良き隣人となることができるのである。

\* \* \*

会社やら学校やらでよく使う「オリエンテーション」ということはの語源は「オリエン」即ち東方である。太陽は東から上る。古の人々はその太陽を見て自らの位置を確認していたことから「方向づける」という意味が生まれたという。野外活動のオリエンテーリングも同じ語源だ。キリスト者にとつて自らの方向を確かめる最も有効で正確な術は聖書に聞くことであり、自らの直観や経験に頼ることはない。イエスを信じた私たちはキリストのからだに組み入れられており、主と兄弟姉妹と共に、主のためにまた世のために働くことが求められている。友よ、自己愛の犠牲者になることを決然と拒否し、共に主を礼拝し、世の人々のために生きようではないか。アーメン。